慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「哲学」第50集記念号発刊に際して
Sub Title	
Author	橋本, 孝(Hashimoto, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1967
Jtitle	哲學 No.50 (1967. 3) ,p.A1- A5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000050-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「哲学」第50集記念号発刊に際して

橋　本　孝

三田哲学会の機関誌「哲学」は、今春を以て第50集を刊行することになったので、これを記念し、且つこの機会に一大躍進を遂げる意味をも含めて、特別号を出すことに決し、ここに20数篇に及ぶ論稿を得て、公刊する運びに至ったことは、まことに喜びに堪えない。

本誌の第1輯が、丸善株式会社を発行所として刊行されたのは、大正15年10月のことであった。編集責任者としての当時の私は、海外留学の出発を目前に控え、傍ら本誌の編集やら校正に忙殺されたその頃の数々の想い出は、今からふりかえってみると、却って言い知れぬ懐しさを禁じ得ないものがある。

本来「三田哲学会」は、文学部が、哲、史、文の三学科に分れていた当時、哲学科関係の教員を中核とし、之れに卒業生や学生が加わり、且つ本会の趣旨に賛同する者を以て組織された学術団体であって、狭義の哲学のみならず、広く当時の哲学科に包含されていた、倫理学、美学美術史、教育学、心理学、社会学等をも包摂する幅の広いもので、規約もこれに呼応して、殊更「広義哲学思想」の研究普及を目的とすると明記された団

体として今日に至っているもので，大正14年初めて百数十名の会員を以て発足したのであった。

それ以前は、いわば組織化に至る胎動時代とも云われべきもので、慶応義塾学報や慶応義塾百年史別巻（大学篇）その他各種の資料を調べて見ると、大体明治末期に哲学大講演会や談話会などが催されていたことが覗われ、本塾の哲学関係に興味を有する教員や学生が中心となって、時折研究会や講演会などが開かれた程度のもので、別段組織化された団体を形成していた訳ではなかった。私自身の経験に徴してみても、大学予科に進んでから、思い出したように催される、かような会合の幹事役をして来たことを憶い起こす位のものであって、大正5年の春、永井荷風氏が正式に本塾大学教授の職を辞任し、その頃西洋美術史家として一新生面を拓いた新進気鋭の教授澤木四方吉氏が帰朝されたので、三田文学の主幹も更迭され、澤木教授が代って三田文学を主宰するようになってからは、漸次在来の編集方針に変更が加わり、私が大学卒業した頃から、文芸に関する創作や評論に止まらず、更に堅い哲学方面の論文をも加えることになり、哲学関係の人達も各種の論文を発表することになった。しかし三田文学は、雑誌の性格から、不知不識の間に一定の制約があり、自分の好む研究論文を思う通りの体裁で掲載することが出来ず、その点不満とする者が漸次出現するに至った。加之、数年後には主幹の澤木教授が病気療養生活に専念するこ

ととなり、且つ学内情勢にもいろいろの変化が起こり、三田文学は、惜しくも大正14年2月、一時休刊の止むなきに至った。

之れより先き、大正8年には新大学令が公布され、私立大学も名実共に大学になることになり、本塾も大正9年に新大学に移行することに決し、哲学科の内部には、アカデミックに徹しようとする雰囲気が漸次醸成され、大正12年には、東光閣書房から「哲学年報」を刊行しようとの議が起ったが、まだその機運が十分熟さなかったせいもあり、遂いに実現するまでに至らなかった。しかし哲学科の内部に於ては、何等の掣肘を受けず、アカデミックの研究論文を自由に発表する機関誌が是非とも必要だという要望が益々盛り上がって来た。偶々その時三田文学が休刊することになったので、之れが一種の機縁となって、急速に三田哲学会が公けの学術団体として結成されることになったのである。このためには幾回となく哲学関係の教員集会が行われ、各種の問題を検討したのであるが、結局学会の機関誌を正式に「哲学」と云う名称に決め、しかも春秋 2 回刊行することになり、塾当局からも必要な経費を毎年一定額補助されることになった。

爾来40数年の間、今次の大戦で一時休刊した外は、多少の起伏はあったにせよ、恙なく第50集を上梓するまでになったのである。此の間、わが三田哲学会の長老川合・船田・小林諸先生を初め、その他二三の人々の記念論文集を公刊したばかりでな

く、慶応義塾創立100年祭には哲学科関係の総力を挙げて700余頁に亘る記念論文集を堂々たる単行本の体裁で出版し、広く世に問うた次第である。

尤も三田哲学会は、単に機関誌「哲学」を刊行するのみならず、定期的に研究会を催し且つ広義哲学思想の普及のため、出版等も行うことになっていた。之れがため、丸善との契約のもとに、「哲学叢書」を刊行する計画を立てたが、結果的には、僅かに川合先生の訳にかかるランケの「唯物論史」だけに止まることになってしまった。

ただ研究会は、戦前は割合に定期的に行われたのであるが、戦後は学界にも一大変動が起こり、全国的視野の下に各種学会が勃興するとともに、その反面、各専攻分野にも細分化された学会なども無数に出現し、三田哲学会の如き一種包括的綜合的な学術団体の例会式のものは、余り行われない慣習となって来たので、大分戦前と様相が変って来たことは争われない事実であろう。

私は、今回哲学50集の記念号を上梓するに当り、第1輯から最近号まで通覧する機会を得、わが国の40数年間に亘る広義哲学思想の変遷や動向を目の当り見ることが出来たことは、望外の幸であり、且つ興味津々として尽くるところを知らぬ思いであった。殊に哲学50集発刊を転機として、多士済々のわが三田哲学会の新進気鋭の諸君が、全力を傾注した研究の成果を遠慮

なく発表し、ひとり三田哲学界の向上発展に尽くすのみならず、広く哲学界全般のためにも大いに貢献されんことを祈念して止まない。由来進歩発展は、有能な新進気鋭の諸君の双肩にかかっているのだという強い自覚を持って貰い度いと思っている。

私は、以上、哲学50集刊行の記念に際して、いささか三田哲学会の成立の事情やその前後の状況にも触れて来たが、平素の所懐の一端をも披瀝してここに擱筆することにする。

(昭和42年2月末日)